

第 17 期生 卒業エッセイ

ふるさと

第 17 期生 江碕 舞香

同期 14 人中 11 人が何の連絡もなくゼミを去った 17 期という代は、この先どのように語られるのだろうか。「ゼミ生が大量に辞めたヤバい代」、そんな一言で、飲み会や噂話のネタの 1 つとして語られてしまうのだろうか。私たちがゼミを守るために必死に戦ってきたこの 2 年間は、散った桜の花びらのように、いつのまにかどこかへ消えていってしまうのだろうか。人間が生き続けるために備えている「忘却」という機能によって、私は、もがいていた辛い日々の記憶を忘れ去り、この 2 年間を美談として語るようになるのだろうか。そうだとしたら、この卒業エッセイは、私たちの必死の 2 年間をありのままに書き残すことのできる、最後の場所なのではないだろうか。

このようにして、私は、かれこれ 1 ヶ月以上、この卒業エッセイの目的や内容についてあれこれと悩み、私の、私たちの 2 年間について様々書き残そうと試したが、結局、消してしまった。なぜか。「みんなで辞めて自分たちの代で小野ゼミを終わらせよう」、「2 年生が間違っただけで入らないように、ゼミ説明会では他ゼミを紹介しよう」、こんな心無い言葉が蔓延る状況を多くの人々が黙認し、中には楽しむ人すらいたような小野ゼミで、私たちが私たちの好きな小野ゼミを守ろうと必死で戦ってきた日々を事細かに語ろうとも、私たちの想いが後輩に伝わっていなければ、今後同じ危機が繰り返されてしまえば、そんな日々は何の意味も持たないからである。きっと、小野ゼミに入る前までの私なら自分の「頑張った」2 年間を書き残していただろう。しかし、この「頑張った」は、極めて相対的な自己評価に他ならず、人々に対して示すべきは、頑張った「結果」、すなわち、今後の後輩たちが築き上げてくれる「小野ゼミ」なのである。そして何より、頑張った「過程」は、自分自身と、共に戦ってきた仲間の心に残ってくれてさえいれば、それ以上の幸せはないということ、小野ゼミで過ごした 2 年間で教えてくれた。したがって私は、この卒業エッセイに私の、私たちの 2 年間を書き残す代わりに、私を支えてくれた人々への感謝の気持ちを書き残そうと思う。

まずは、18 期のみんなへ。私たち 17 期を救ってくれたのは、紛れもなく 18 期のみんなです。まだみんなが小野ゼミ生になる前、都竹くんをはじめとする 18 期のみんなが奮闘する私たちにかけてくれた言葉があったからこそ、17 期は諦めずに頑張ることができました。こんなに大量のゼミ生が辞めてしまった小野ゼミに入るという勇気ある選択をしてくれて、そして立派な小野ゼミ生として 1 年間頑張ってくれて、本当にありがとう。これからもみんなで力を合わせて、熱く、温かい、素敵なゼミを築いてください。

尊敬する友人たちへ。きっとこのエッセイを読むことはないと思うけど、みんなの存在が私に何度も勇

気をくれました。空気を読んで周囲と意見を合わせ、自らの意思を放棄するのならば、たとえ嫌われようと衝突しようと自らの意思を伝えるような、人として強いみんなに恥じぬ友でありたいと、何度も自分を奮い立たせることができました。たくさん話を聞いてくれて、応援してくれて、本当にありがとう。

お母さんへ。2年間（いや、22年間）、たくさんのお支援をありがとう。少しでも疲れないようにと、家から最寄り駅までの徒歩7分くらいの道を、毎日何時でも車で送り迎えしてくれたよね。徹夜続きだった11月には、「も〜習志野ナンバー恥ずかしいんだけど〜」なんて言いながら、移動時間に少しでも眠れるようにと、何度も三田まで送ってくれたり、終電を逃した私や同期を恵比寿まで迎えに来て、家まで送り届けてくれたりしたよね。気がついたら送迎のエピソードばかりになってしまったけれど、その他の面でもたくさん応援してくれて、本当にありがとう。

そして、私の大親友、森直也くんへ。人がいないからという理由で、ゼミ長になってしまい、その名にふさわしい能力も自信も何もなかった私をずっと支え続けてくれて、本当にありがとう。ゼミでは気丈に振る舞っていても、ストレスや睡眠不足ですぐご飯を食べられなくなってしまうような弱く未熟な私を、実務面でも精神面でも支え続けてくれました。どのような時も決して弱音を吐かず、自分の役割を全うしている森くんを心から尊敬し、自分もそんな人でありたいと思います。私は、そんなカッコいい森くんが論文代表として、人知れず悩みながら大きな責任を背負って頑張り続けてくれた日々を、私たちの好きな小野ゼミを残そうと共に戦ってくれた日々を、絶対に忘れません。最初はあまり仲良くなかったけど、今では何でも話せる（例えば、~~森くんの服って原色カラフルすぎるよねとか~~）、心から信頼できる友人です。これからも、誰よりも直向きな姿で、みんなから信頼され、慕われる、素敵な先輩でいてね。

最後に、私は、小野ゼミにたくさんのお礼を伝えたい。小野ゼミは、両手に抱えきれないほど多くの人生の財産を、私に与えてくれた。小野ゼミに入らなければ、学問に向き合う難しさや楽しさだけでなく、他人にはない自分の良いところや悪いところ、仲間との困難の乗り越え方を知ることにはなかったかもしれない。私にとっての小野ゼミは、16期に渡る歴代の先輩方と同じ、大切な、第2の「ふるさと」だ。



2年間本当にありがとうございました！（著者は下段右から3番目）